

共働き家庭の父親のワーク・ファミリー・バランス

－ 三領域のケイパビリティを焦点にして －

○ 追手門学院大学 善積京子、京都華頂大学 斧出節子、
国立社会保障・人口問題研究所 釜野さおり、大阪大学 高橋美恵子、佛教大学 松田智子

1 目的

日本では、「仕事と生活の調和憲章」や「仕事と生活の調和推進のための行動指針」の策定、「育メンプロジェクト」の発足など、男性の子育て参加や育児休業取得促進が政府レベルでも取り組まれているが、父親の育児休業取得率は2%に留まる。「仕事」「家庭生活」「個人生活」の理想と現実を尋ねた国際比較調査でも、本人の希望に反して仕事を優先させる生活を送っている男性が他の国に比べて多い。本報告では、日本ではなぜ父親のワーク・ファミリー・バランス（以下、WFB）が進まないのか、それを阻んでいるメカニズムをA.センのケイパビリティ・アプローチから探る。

2 方法

本報告で用いるデータは関西圏の未就学児をもつ共働き核世帯で暮らす父親 53 名に対する調査から得たものである。条件に適合する対象者の抽出は、調査会社に依頼。同社は、蓄積している調査協力可能者リストを使用して対象者を募り、属性などの基本情報を得るために事前アンケート調査を郵送法で実施。インタビュー調査は、2010年に3期に分けて実施。調査分析では、調査対象者の人生目標・価値観などの主体的側面（Agency）に焦点をあてる。職場環境・家庭環境・社会的子育て支援環境という3つの機能群に対して、状況を変えるための父親の実践に注目し、WFBの実態と理想の間のギャップから、父親のWFB実現の促進および阻害要因を抽出。

3 結果

<職場領域>子育て支援利用状況は、「育児休業」0件、「看護休暇」9件（そのうち公務員が多い）、「時間外労働制限」1件、「フレックスタイム」2件。増員や配置転換の要求し実現したケースもある。日頃から家庭での子育てを話題にあげるなど、周囲への積極的働きかけをしている。

<家庭領域>妻が夫に家事や育児に関わることを積極的に働きかけるケースが多い。夫の対応には、①妻の要求に前向きに応じる、②言われた時のみする、消極的対応、③聞き流すなど、基本的に態度を変えない、など3つのタイプが存在。

<社会的子育て支援領域>妻方・夫方親から日常的・緊急的支援を受けるケースが大半。妊娠を契機に実家の近くに転居（5件）、保育依頼（7件）など、戦略的に親の支援を活用。

<仕事・家庭・個人の時間のバランス>仕事：家庭：自分の時間の比率の平均は、現実には6：3：1、理想は5：3：2。仕事量を減らし、その分を自分の時間に振り向けたいと望むケースが多い。「自分の時間」を確保するために、睡眠時間を減らすというケースが多く見られる。子どもが小さい時（3歳まで）は休日を家族で一緒に過ごすことが多い。「夫婦だけの時間」がないケースが多い。

4 結論

職場の男性の仕事優先の文化・風土がWFBの実現の阻害要因となり、WFBを達成するケイパビリティは、エージェンシーのもつ「権利意識」など個人の能力によって決定される側面が強い。家庭での実践は、妻の就労に対する意味づけ、過去の体験・生育歴、妻からの働きかけなどに影響を受ける。子育て期にある共働き家族においては、WFBの実現に実家の支援が重要な役割を演じている。